

## 「タリ」と「テアリ」

山下, 和弘  
福岡女子短期大学講師

<https://doi.org/10.15017/11937>

---

出版情報 : 語文研究. 66/67, pp.111-127, 1989-06-10. 九州大学国語国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

# 「タリ」と「テアリ」

## はじめに

所謂、完了・存続の助動詞「タリ」は、「テアリ」が融合して出来たものである。そうして、「タリ」の成立後「テアリ」は次第に勢力を失い、ついには「タリ」に圧倒されるに至った。このことについて春日和男氏は、

即ち先づテアリは散文的用語としての特色が起り、次いでタリは散文に侵入してテアリの領域を漸次狭めて行つたものであらうが、その際保守的な僧侶等の文体ではテアリがやゝ抵抗力を持つてタリと暫く対立共存した。然しそれもさう長いことではなく、やがてタリの勢力の前にはかなくも潰え去つたといふことになりはしないか。<sup>注</sup>

以上のように、「タリ」「テアリ」併用の時期である上代から、「タリ」主用である中古にかけての状況を推定し、結論づけておられる。

ところで、従来、上代に指摘される「テアリ」と、中世以降、現代に至る「テアル」との関連は注意されていなかったが、柳田征司

山下和弘

氏は、

1、近代語の「テアル」は、いわゆる完了の助動詞「タリ」の原形であるところの「テアリ」の生きのびていたものが、復活したものである。

2、古代の間「テアリ」の形を劣勢ながら存続させていたのは、「テ侍リ」と断定の「ニテアリ」の形であった。

3、「テアル」は、いわゆる完了の助動詞「タリ」が進行態・既然態の意味を表わさなくなったために、それにかわって復活することとなった。<sup>注</sup>

このように述べ、「タリ」主用の中古にあつても「テアリ」は滅んだわけではなく、生き伸びて現代に至ることを論じられた。柳田氏のこの論は助動詞「タリ」の研究に新たな視点を与えるものであるといえよう。本稿はこれらの研究を踏まえた上で、「タリ」と「テアリ」の関係について重ねて考察を試みるものである。

ここでは中世末の「タ(タリ)」と「テアル(テアリ)」の関係について述べてみようと思う。

まず、「虎明本狂言」の用例をいくらか示す。

○さて、世間にはいた物註が有とはいへども、今の者のほど、ぶあくにいたものはなひ(ぶあく)

○たのふだひとに申たらは……(鼻取ずまふ)

○惣じて、はじめた道はとをひものじや(入間川)

○あのやうにしたひが、あれに似たゑほしがあるまひ(鶏蟹)

○それはにがつた事でござる(ひつしき蟹)

○そなたのほそくとした口にて、身共がほにくひつひてたもれ(せつぶん)

○しうをもつた者もおほけれ共……(ぬげがら)

○様子は汝がごとくでじきにわたさうずれども、さいはひめしつれた太郎くわじやに渡す(くらままいり)

この時期、「タ(タリ)」は既に存続の意味を失っている。それは、次のような用例で具体的に示すことができる。

○VM. Xite sore na nanto fetele ataroz? 「して、それは何と果てであったぞ?」(「天草版平家物語」巻一・第一)

したがって、「タ(タリ)」が一見、存続の意味を表しているように見えても、それは実はそうではないという解釈を行う方が穩当であらう。柳田征司氏は「タ(タリ)」の終止法などに関し、「虎明本狂言」の用例を引いて、『……事態としてはその結果が存続して

る。しかし、表現としては結果の存続は表わしていない』、また、右に挙げた「ぶあく」の連体法の用例や、同じ「虎明本狂言」の、  
○まかぶらのなりも、口わきのくわつと耳まできたも、そのまゝ  
ようにた(鬼がわら)

に対して、「形状動詞「似る」が常に存続の意味を表わすために、全体として存続の意に理解されるものと見られる』と述べておられる。  
註

ところで、右に挙げた「虎明本狂言」の「タ(タリ)」の連体法の用例だが、ここでは存続の意味に理解できるものを選んだつもりである。ところが、「テアル(テアリ)」の用例を見てみると、「タ(タリ)」に頻繁に見られる連体法がかなり見えにくいのである。以下、「テアル(テアリ)」の用例を若干挙げてみる。

○ことには御歌の御会の時分もつてまいり合て有程に……(松ゆつり葉)

○きやつがきたゑほしをみれば、ちんじゆほこらの、いがきにて有程に……(今參)

○念入て有程にそうじやあらふぞ(ひの酒)

○なんじがきたつて有程に……(あさいな)

○そのときのかせんにかた／＼あはれたときひて有程に……(同)筆者が見たかぎりでは、「テアル(テアリ)」の連体法であるかもしれないと思えたのは、次の例のみである。

○おやの命を申うけ、たすかりたるためしとこそ申伝て有物を、そのうへ御ちかひをやふり給ふ物ならば……(鶏猫)

しかもこの場合の「物(を)」は体言相当ではないという解釈が可能である。すなわち「テアル(テアリ)」は連体法には使われておら

ず、「タ（タリ）」がその欠を補っているように見えるのである。

また、「醒睡笑」の「テアル（テアリ）」全四一例のうち、助動詞の下接しない三〇例の中で、連体法の用例は、

○昔よりさだまつてあることよ。（巻之三）

○……銘々に名をいうてある狂言あり。（巻之八）

以上二例である。連体法に使われることがないわけではないが、これはいかにも少ないように見える。連体法は「虎明本狂言」の場合と同様、「タ（タリ）」が多くその任を果たしている。

○それは逆馬になつた物であらう。（巻之四）

○馴れたるわりなき友あつまり、（巻之五）

○やぶれたどうがめ岩の洞（巻之七）

○年ふけたる人、（巻之七）

この現象について、柳田征司氏は、先に引用したことを踏まえたうえで、『連体用法に「テアル」よりも「タ」の方を用いるのは、工藤力男氏が指摘されているように、ひきしまった形を良しとする言語感覚からくるものと解される。』と述べておられる。この解釈は共時的に見たものであり、正しいと思われる。少ないとはいえず、「テアル（テアリ）」の連体法は確かにあるのであって、そうであればこれは語法の問題だとは認め難い。

ところで、この現象は中世期以降のものなのであるか。そうでないとすれば、いつ頃からこのような現象が見られるのであろうか。次節以降、連体法の状況を中心に「タリ」と「テアリ」の関係を見ていきたい。

## 二

前節では、中世末及び近世前期における「タ（タリ）」と「テアル（テアリ）」の関係を、連体法を中心に見た。この時期にあつては、「タ（タリ）」が存続の意味を失っているのであり、その中で、両者の連体法の関係がこのようであることに注目されるのである。

さて、本節以降では両者の関係について中世末よりも古い時期の状況を観察していくことにする。

ところが、大抵の資料では「テアリ」の用例数が非常に少なく、前節でみたような現象があるのかどうかを確認することもできそうにない（表一）<sup>註</sup>。

（表一）

資料	テアリ	タリ
沙石集	7	750
平家物語	19	1,867
法華百座聞書抄	4	85
大鏡	3	397
古本説話集	11	490

これらに対し、ある程度まとまった「テアリ」の用例が見られる

ものとして、「今昔物語集」を挙げることができる。

この「今昔物語集」の「テアリ」三五〇例のうち、助動詞が接続するものを除くと、連体法として認められそうなのは三一一例である。以下、それらを観察する。

- 其ノ国ニ至テ有程……………(卷三・三〇)
  - 太子其ノ国ニ住ル有程……………(卷四・四)
  - 妻恐テ怖レテ有間……………(卷四・二二)
  - 南壁ニ寄り至テ有程……………(卷九・三三)
  - 暫ク立留テ有間……………(卷九・三四)
  - 弟子等少ク出来テ有間……………(卷一一・三四)
  - 修行者モ止事无ク成テ有間……………(卷一五・二七)
  - 家女、此レ見テ念仏ヲ申入テ有程……………(卷一五・四二)
  - 今ハ限リ也トテ思テ有程……………(卷一六・三三)
  - 継母ノ後安者ニ思テ有程……………(卷一九・二九)
  - 此レ居テ思緩テ有程……………(卷二四・八)
  - 其夜ハ火焼物語ニ有程……………(卷二六・九)
  - 其ノ御説経所ニ居並テ有程……………(卷二八・八)
  - 然ル氣无シ持成テ有程……………(卷三〇・四)
- 以上のような、それが修飾する体言が「程」及び「間」である例が二八例あって(「程」二〇例、「間」八例)、「程」「間」以外は、
- 面背廻テ有事也(卷九・三五)
  - 馬ニ乗テ侍来テ云(卷一六・二八)
  - 抜取テ髪ヲ奪取テ……………(卷一九・一八)
- この三例である。これに対して「タリ」の場合は、
- 道邊ニ破壊ル寺ノ有……………(卷一・一八)

- 然レ佛ノ御弟子ノ中ニ阿難尊者勝レテ人也……………(卷四・一)
  - 實ニ心ニ非ズ経ヲ誦聞キテ功徳如此……………(卷六・四八)
  - 角生テ馬来レリ(卷一〇・三九)
  - 可然ク出テ水也(卷一一・二二)
  - 忽ニ老ク翁船ヲ指テ……………(卷一六・一一)
  - 此ノ殿上人ノ数立テ前ヲ渡……………(卷一九・二五)
  - 兩岸ニ曲テ木有リ(卷二五・一三)
  - 此ノ恐ス事ヲ知テ若キ殿上人四五人コソ……………(卷二八・四)
- 以上のような、「程」「間」以外の名詞が付く例が圧倒的に多い。(表二)はそのような名詞が付く用例数を示したものである(他の助動詞が接続する場合を除く)。

(表二)

		程・間	その他
タリ	28	160	1,856
テアリ	3		

すなわち、「テアリ」の場合は「程」「間」に集中しているのに対し、「タリ」の場合はそれ以外のものが多いというわけである。これは、中世末に見られる「タ(タリ)」と「テアル(テアリ)」の連体法における関係と軌を一にしているように思われる。中世期にあっては連体法以外では両者は全く意味を異にする。これについて、「今昔物語集」ではどうかというと、両者とも存続の意味を持っているようである(それ以外のことについてはいまのとこ

ろ、明らかではない)。そうすると、「タリ」が存続の意味を失っていくにあたって、「テアリ」がその役目を単独で担うようになったのだが、「テアリ」は連体法には使われにくいという事情があったため、それに関してのみ、主として「タ(タリ)」が存続の意味を担い続けたのではあるまいか。このように考えると、中世末における「タ(タリ)」と「テアル(テアリ)」の連体法の関係と「今昔物語集」の「タリ」と「テアリ」のその関係を結び付けて見ることができようと思う。

ところで、「今昔物語集」に見られるこのような現象は、これ以前の時期にあっても見られるのであろうか。次節ではそのことを観察してみたい。

### 三

中世末に見られる「タ(タリ)」と「テアル(テアリ)」の連体法における関係と「今昔物語集」で見られた「タリ」と「テアリ」の連体法における関係とが結び付けて捉えられる可能性があることを前節で見たが、ここでは「今昔物語集」以前の状況がどうであったかを観察してみようと思う。ただし、中古期の文献の「テアリ」の用例は、「タリ」と比較できるほどの数を持っていない。柳田氏の論<sup>注</sup>よりその調査結果を借りて示すと(表三)の通りである。

しかも、この時期にあつては「今昔物語集」のようにまとまった用例数を持つ文献を見出すことができなかったため、比較的用例数の多い「源氏物語」と「枕草子」の用例を、以下、見てみることにする。

(表三)

資料	テアリ	タリ
竹取物語	2	95
伊勢物語	6	93
土佐日記	1	43
平中物語	7	143
大和物語	7	308
落窪物語	17	628
枕草子	25	1,540
源氏物語	61	4,293

まず、「源氏物語」<sup>注十一</sup>である。「源氏物語」の「テアリ」のうち、助動詞の接続しない一一例の中で、連体法は、

○……もてあがめて後見だつに罪隠してなむあるたぐひもあめるを……(東屋)

○……と思ひたまへし人、世に落ちあぶれてあるやうに、ひとのまねびはべりしかな(手習)

この二例である。また、「源氏物語」における「テ侍リ」は一一六例である。このうち、助動詞が接続した五七例を除いた五九例のうち連体法の用例は、

○隣のこと知りてはべる者呼びて……(夕顔)

○あひ知りてはべる人々、……(須磨)

○いとかしきは田舎びてはべる袂につつみあまりぬるにや(明石)

○いとよくをさめてはべる心をとて……(夕霧)

○西の御前に寄りてはべる木を……(竹河)

○この三月に、年老いてはべる母の……(手習)

以上である。あまりに用例数の少ない中でのものであり、これらのみを以てどうこう言えるものではないが、その現れたかが「今昔物語集」の「テアリ」の連体法のものとは違うことはある程度見てとれるかもしれない。

また、「枕草子」<sup>卅二</sup>を見てみると、「テアリ」二五例のうち助動詞の

接続しない一五例の中で連体法のもは、

○しひ給ひ侍らしなといひてある事あらふかは(八八段)

○おもひかけ侍らしなといひてあるころかうらんせさせ給て……

(一〇四段)

○物いひやり文とりつかせなとてあるさま……(二四二段)

この三例である。また、「テ侍り」二一例のうち助動詞の接続しない一〇例の中には連体法はない。他の文献の状況もおおむね似たようなものであって、「テアリ」「テ侍り」の連体法の状況が「こうである」とは確言できるものではない。「今昔物語集」における状況とは違うようだということがおぼろげに見えるはするものの、それをいうためにはそもそも用例数そのものが足りないのである。

しかし、用例数が少なすぎるということは反面、圧倒的な「タリ」と比較したとき、「テアリ」が「タリ」とこれといった違いを持っていない(何らかの違いがあった可能性までは否定できないにせよ)ことを意味しているのではなからうか。

もともと、「タリ」は「テアリ」が融合してできたものである。春日和男氏によれば、上代にあっては「タリ」と「テアリ」は位相上

の差異をもって共存していたということであり、<sup>卅二</sup>そうであるならば両者に意味・用法等の差異は考えないほうが良いことになる。すなわち、「タリ」と「テアリ」はある時期までは、位相に關することを除き、これといった差異を持っていなかったことができるのではないか。ことに中古期にあっては文献に現れた様相からのみ見れば、「テアリ」は「タリ」に従属しているように見える。右に挙げたいくつかの用例はいずれも「タリ」の意味・用法等の範疇に包含されるのである。

だとすれば、「今昔物語集」から後、「タリ」と「テアリ」の關係が連体法に關して中古期以前とは違う様相を呈しているということは、両者の關係に何らかの変化が生じたとは考えられないだろう。すなわち、中世末の「タ(タリ)」と「テアル(テアリ)」の關係は「今昔物語集」に見られる「タリ」と「テアリ」の關係が初めて可能であると思われるのである。そうして、それがどうも見られないと思われる中古期以前の「タリ」と「テアリ」の關係からは中世末の状況はいかにも生じにくいと考えられるであろうか。

また、「今昔物語集」の「タリ」と「テアリ」の用例数を見ると、卷によつては「テアリ」が「タリ」の十分の一ほどの用例数を持っている(表四)<sup>注四</sup>。これは中古期の諸文献の「タリ」に対する「テアリ」の数から考えれば、多いといえる数であろう。これくらい比率であれば、「テアリ」が「タリ」に従属していると言ふのは難しい。ただ、この場合の両者の違いはいまのところ、連体法に關すること以外わからないが。

以上、「タリ」と「テアリ」の關係について連体法を中心に觀察し、

(表四)

テアリ	タリ	巻
2	113	1
3	241	2
3	107	3
9	166	4
6	225	5
1	105	6
3	138	7
12	214	9
7	221	10
3	167	11
12	180	12
7	167	13
5	212	14
15	211	15
16	334	16
15	189	17
47	489	19※

テアリ	タリ	巻
11	284	20
5	90	22
4	165	23
25	356	24
11	181	25
21	449	26
22	403	27
17	485	28
38	440	29※
14	169	30
16	312	31
350	6,813	計

※印のついで  
た巻の用例  
数が特に注  
目される。

通時的解釈を行った。ここで論じたことは、助動詞「タリ」が中世末に見られるような姿になるにあたって、その出発点となり得る状況を「テアリ」との関連において「今昔物語集」に指摘することができるということである。このことから当然、考えなければならぬのは、「今昔物語集」における状況がどのような理由で生じたのか、また、これ以後どのような力が働いて「タリ」が存続の意味を失っていったかである。これらのことについては今後、更に考察を進めていきたい。

## 注

- 一、『存在詞に関する研究』(昭四三・風間書房)二五五頁。
- 二、『近代語「テアル」』(愛媛国文と教育)一九昭六二・一二)。
- 三、テキストは池田廣司氏・北原保雄氏『大蔵虎明本狂言集の研究』(本文篇上中下)。
- 四、二と同じ。
- 五、テキストは岩波文庫版『醒睡笑』。
- 六、二と同じ。なお、ここで柳田氏のいう工藤氏の論は「連体用法の「た」の解釈——アスペクト試論——」(岐阜大学国語国文学)一六昭五八・一一)。
- 現代にあっても連体法で「曲がった道」とか「とがった鉛筆」とかいったときは、「タ」が「テイル」よりも優勢なのが一般的である。
- 七、『沙石集』は深井一郎氏『沙石集総索引』、『法華百座聞書抄』は小林芳規氏『法華百座聞書抄総索引』、『古本説話集』は山内洋一郎氏『古本説話集総索引』、『平家物語』、『大鏡』は日本古典文学大系(岩波書店)による。
- 八、テキストは日本古典文学大系(山岩波書店)。
- 九、この場合の「程」「間」が何れも体言相当であるとはいいきれない。接続助詞的用法である可能性もある。
- 十、二と同じ。
- 十一、日本古典文学全集(小学館)による。
- 十二、田中重太郎氏『校本枕冊子』による。
- 十三、一と同じ。
- 十四、表のうち「タリ」の用例数は岩井美穂子氏ら「院政初期における助動詞タリ・リの文体論的考察——『今昔物語』を中心に——」(大谷女子大園文)一〇昭五五・三)の調査による。